古代人たちの祈りが聞こえる

シリーズ・まちの文化財　第二回「威奈大村の蔵骨器」

この球形は何でしょう。いかにも古めかしい色合いをしています。所々はげたような金色がにぶい光を放っています。そして、真ん中に入った線刻より上の部分にはくっきりと文字が刻まれているのが分かります。

これが貴重な古代の遺品であり、香芝から出土した「威奈大村の蔵骨器」といわれるものです。すなわち古代において、火葬して死者の遺骨を埋葬する際に用いられた骨入れの器なのです。骨蔵器ともいわれている容器のことです。

江戸時代の明和七年(一七七〇)ごろ、穴虫の字馬場から出土したとされています。穴虫西集落の道路元標から左折して狭い道を五〇メートルほど行くと、ヤブノ池に着きますが、この池の北側の通称ゴボ山から出ました。

この「威奈大村の蔵骨器」は、発見された時は三重の容器からなっていたといいます。それは遺骨が漆器の骨壺に納められ、その骨壺が金銅器に入れられ、さらにその金銅器は大かめの中に入っていたというのです。とても細心に埋葬されていたことがうかがえます。この中で現存しているのは金銅器の部分で、今は大阪の四天王寺の所蔵となり、国宝に指定されて、京都国立博物館に保管されています。

この容器は高台の上に球状の容器を作り、真ん中から二つに切半される形をしています。

蓋の部分に刻まれている文字は、この器に納められた奈良時代の官人である威奈大村の輝かしい事蹟を今に伝えているのです。

それによると、威奈大村は宣化天皇四世の孫である威奈鏡公の第三子として生まれ、文武天皇の時代に小納言に選ばれ、大宝元年(七〇一)の大宝律令において従五位下に叙せられて侍従をかねている。そして慶雲二年(七〇五)越後城司に任ぜられ、慶雲四年(七〇七)四月二十四日、年齢四十六歳で任地で没し、その年の十一月二十一日に葛木下郡山君里狛井山岡に埋葬されたとあります。

この克明な墓誌は、我が国の墓誌銘の中でも最も長文のすぐれた文章として知られています。そして威奈大村その人の高潔な人格や行いが讃えられていることがうかがえます。亡き人をしのんで、送った古代人の敬虔な祈りの声が今にも聞こえそうな文章が刻まれているのです。そしてこうして今日まで、その人となりは伝えられたのです。

この威奈大村の墓誌の他に、香芝では穴虫高さが二四・三センチメートル、直径は二四・四センチメートルの大きさをしています。そして刻まれた三九一の文字は、貴重な墓誌として有名なものです。鍍金の金色が所々残る合子の火葬墓からも蔵骨器が出土しています。これは二上山の凝灰岩から作られた家形をしたものです。こうしたことから二上山の山麓は、古代の火葬地であったとも考えられています。